「ミニ学術植物園構想」と「地域とともに歩む大学」を目指した学部棟周辺の緑化整備活動 －「みのりの小道」－

山岸主門・武田久男・巣山弘介・小林伸雄・持田正悦・土倉まゆみ・寺田和雄・足立哲男・赤間一仁・林　蘇娟・井藤和人・宮永龍一・上野　誠・佐藤利夫・川口英之・地阪光生・一戸俊義・青木宣明・足立文彦・濵田年騏・伊藤勝久・喜多威知郎・谷野　章・土肥　誠・青柳里果・野中資博・森　也寸志・木原康孝・橋本　哲・松本真悟・伴　琢也

はじめに

生物資源科学部棟の周辺は，除草作業が年に数回行われるだけで，日常的な手入れが施されていない状態であった．その対策も兼ねて，平成16年度の学部長裁量経費に申請し，採択後の秋から，教育・研究材料であるツツジやボタン，ブルーベリー等の植物を植付け，「ミニ学術植物園」の創出のために動き始めた．この活動は，大学職員や学生にくわえて，地域住民にも公開して実施している．大学がもつ植物等にまつわる様々な「知」や「技」を市民の皆さんに提供し，また，市民の皆さんは大学でそれらを実践する，という新しい形の「学術成果の地域社会への還元」である．平成17年度は，計31名の技術職員・事務職員・教育職員が申請者となり，活動の主体となった．

方　法

以下のような手順で本活動を実施した．

■愛称づくり：本活動を広く理解し，参加してもらうため，親しみやすい愛称をつくることにした．事前に学生から愛称を募集し，それをもとに，2005年8月実施の本活動第12回公開作業時に投票を行った（投票総数83票）．その結果，教育・研究成果という当学部の「みのり」を樹木チップで覆った「小道」周囲に配し，気軽に散策しながら学んでいただく，という意を込めた「みのりの小道」に愛称が決定した．

■場所：生物資源科学部1号館南側から，2号館西側を通り，3号館西側までを「みのりの小道」でつなぎ，その周囲を当面の活動場所として設定した．

■公開作業のスケジュール：できるだけ多くの皆さんに参加していただくために授業や会議等の時間帯を考慮し，基本的に毎月第2水曜日に公開作業を設定した．そのほか，授業（農作業管理論；6月）や学部環境整備（8月），学部10周年記念事業（10月）等の行事に合わせて実施することもあった．

■公開作業の内容：事前に，主な内容を決め，実際には，季節や植物の成長，スタッフの都合等を考慮し，各公開作業の直前に本活動の世話人で打合せを行い決定した．作業に加えて，毎回，研究紹介コーナー（5分間スピーチ）として，教職員や学生が参加者にわかりやすく説明をする時間を設けた．

■広報：半期に一度（3月と9月），日程や主な内容をポスターにして，学部内への掲示（15ヵ所）や大学HP内に掲載した．そのほか，農業生産科学部門主催の公開講座や大学開放事業の参加者への個別連絡，近隣の川津公民館の協力の下，「速報かわつ　2006年2月号」による周知活動も実施した．また，当活動の申請者・関係者には，公開作業前日にメール配信し，周囲の学生等への周知を依頼した．

■日常の管理：公開作業日の他に，その区画を主に教育・研究の場として使用する教員研究室の学生や自主的に気がついた職員が除草や水やり等の管理作業を適宜，実施した．

結　果

平成17年度は，第7回（4月27日）から第21回（3月8日）まで，計15回の公開作業を実施した．

■参加者数：計15回の公開作業で，一般参加者が21%，学生参加者が40%，教職員参加者が39%で，計437名が参加した（図1）．

■主な内容：

・チップロード：丸太（三瓶演習林産；径15cm程度）の樹皮剥ぎ・敷設，チップ（針葉樹を破砕したもの）敷き．

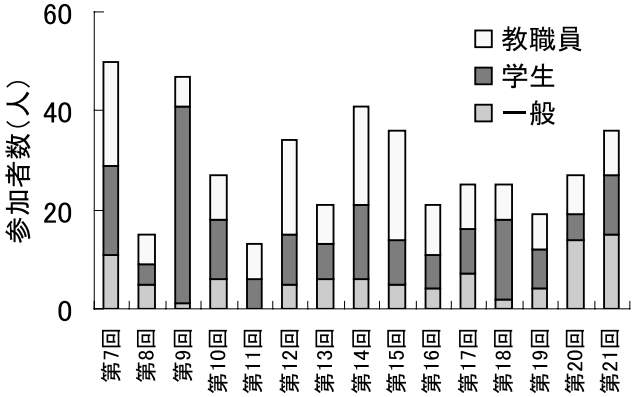

図1　みのりの小道の参加者数

・研究紹介コーナー（5 分間スピーチ）等：18 名，のべ 34 回実施.
・研究紹介パネル：丸太（三瓶演習林産；径 40cm 程度）の設置，パウチ原稿の掲示.
・メイン看板：丸太の設置，みのりの小道の印字，学生による看板へのイラスト描き（羊＆花＆蝶）.
・除草：人力にくわえ，農業生産学科食糧生産学講座の羊の力も借りて年間を通じて実施.
・植物管理等：ツツジ類，ボタン，サツマイモ，風除け作物（クロタラリア・ソルゴー）等の栽培，サクラの植付け・管理，キョウチクトウ＆カキの整枝・剪定，ブルーベリー・カキ・ナツメ・ザクロの収穫など実施.
・その他：焼き芋（生資 10 周年記念事業），木製ベンチ作製（6 個），落ち葉置き場設置，ハナバチの営巣地作り，唾液によるストレス測定の体験，植物名ラベルの設置，アンケート調査など実施.

主な成果等

■教職員および学生が，今まで当たり前に思っていた身近な「みどり」に対して，自然と意識するようになり，主体的に植物と関われるようになった.
■学外者が，手入れの行き届いた，また存在価値のある植込み植物に接することで，生物を扱う本学部の取組みに対して理解が深まった.
■地域住民が大学構内の緑化活動に携わる機会の創出ができ（開かれた大学），その活動のなかで学生も一緒に学び，育つことができた（学生が育ち，学生とともに育つ大学）.
■学部や大学院開講の授業（講義，実験，実習），また近隣の小学校等の訪問時に利用された.
■生資 10 周年記念事業で，みのりの小道スペース内にサクラの記念植樹を行い，また，みのりの小道の活動紹介も実施できた（10 月）.
■「生物資源科学部だより Vol.2」にみのりの小道の紹介記事が掲載され，保護者の皆さまにも周知ができた.
■生資 EMS 対応委員会のキャンパス・アメニティ作業部会と連携した活動を行った（10 月～）.
■6 月環境月間の企画として，全学の EMS 活動の中に位置づけられた（6 月）.
■大阪大学による「参加型キャンパス環境マネジメントに関するアンケート調査」に先行事例として協力した（11 月）.
■島根大学ミュージアムのミュージアム・コアゾーン内の屋外施設として位置づけられた（3 月～）.
■地元のテレビ等の取材を受け，放映された．その結果，新たな一般参加者が加わった（1 月）.
■設置した木製ベンチの，昼食時の学生等利用や各種入学試験時のご家族の皆さんの利用が見られるようになった（8 月～）.
■園芸同好会等の学生団体に日常的な活動の場を提供できた（3 月～）.

以上のように，当初予想していた以上の多面的な効果を得ることができた．参加者アンケートの結果，「講師はわかりやすい説明をしていたか」，「学力や知識を身につけるのに効果的だったか」および「本日の活動に満足したか」のいずれの設問についても，「そう思う」と「少しそう思う」をあわせた回答率は 95% 以上であった（表1）.

表 1　みのりの小道参加者によるアンケート結果

	そう思う	少しそう思う	どちらでもない	あまりそう思わない	そう思わない
Q1：講師はわかりやすい説明をしていましたか？（%）					
	90.9	7.6	1.5	0.0	0.0
Q2：学力や知識を身に付けるのに効果的でしたか？（%）					
	71.2	25.8	1.5	1.5	0.0
Q3：本日の活動に満足しましたか？（%）					
	78.8	16.7	3.0	1.5	0.0

※2006 年 2 月～3 月に実施（n＝66）.

このような学校内の緑化整備活動を計画的に構成員が行う事例は，小中学校では比較的多く見られるが（長島ら 2004），大学ではごく一部に限られ（東京農業大学等），とくに市民を恒常的に加えた企画は見当たらない．今後，さらに様々な分野，立場の人たちが参加しやすい仕組みづくりを心がけていきたい.

参考文献等

長島康雄・山田和徳・平吹喜彦（2004）学校緑化に対する環境教育からのアプローチ．宮城教育大学環境教育研究紀要 7: 75-83.
東京農業大学世田谷キャンパスの事例．http://www.nodai.ac.jp/iso/setagaya/activity/isobeya.html.